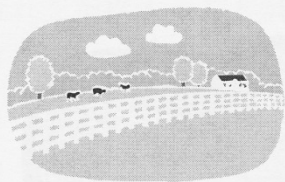


“おもしろくて ためになる 学びの共有”^{わかちあい}

秋田県教育カウンセラー協会機関誌

教育カウンセラー



あきた

13号

2007年（平成19年）7月8日発行

キャリア教育は小学校から

秋田県教育カウンセラー協会

代表 水戸谷貞夫

中高一貫校が発足しようとしていた頃のことである。小学校長を体験された方に、「ぜひ小学校学習指導要領に進路指導を取り上げて下さい。」とお願いしたら「それはムリです。」と断られたことがあった。長年の願いであっただけにがっかりした記憶がある。

平成11年の「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」（中央教育審議会答申）に、「学校と社会及び学校間の円滑な接続を図るためのキャリア教育（中略）を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある。」と示されたことを契機に、文部科学省をはじめ各方面から研究や実践が行われ、その報告がなされるようになったのである。

例えば、「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議（報告書）」、平成16年1月、文部科学省、「小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引き」平成18年11月文部科学省のほか、「若者自立・挑戦

戦略会議」からも多くの報告書が出されているし、（財）日本進路指導協会の機関誌「進路指導」では、平成14年から毎号のように「キャリア教育」を取り上げてその普及に努力されているほか、実践のための研修講座も実施されている。

秋田県内でも「キャリア教育」をとりあげておられる小学校・中学校・高等学校が多く見られるようになったことはうれしいことである。

本年1月の秋田市現職・退職校長会の教育懇談会で、「新しい時代に対応する特色ある学校経営と校長の在り方—キャリア教育の視点をふまえた生き方指導を通して—」のご発表は、参会者に強い感動を与えたものであった。（ご発表者は、小学校長先生であった。）

「キャリア教育」は、「学校教育で、自分自身の生き方や在り方を、学ぶことや働くことと関連付けて考え、追究し続ける力を育てること」（「キャリア教育の推進に向けて」秋田県教育委員会、平成18年3月）を受け止め、力強く推進されることを心から望んでいるところである。

「教育カウンセリング」に学んで

ハローワーク秋田 相談員 猿田 健一
(初級教育カウンセラー)

私が、初めて、日本教育カウンセラー協会の催しに参加したのは、01年8月、秋田市千秋会館で開催された、國分康孝先生による「こころを育てるカウンセリング」公開講演会でした。04年10月、「教育カウンセラー養成講座」を受講し、初級教育カウンセラーの認定を受けました。以来、「秋田・学校におけるカウンセリングを考える会」と「Q-U学習会」の定例会をはじめ、宿泊研修会、宿泊の構成的グループエンカウンター(SGE)、毎年の養成講座を通して、「育てるカウンセリング」と「共育」という考え方に出会い、SGE体験やたくさんの役立つ理論と方法を学ぶことができました。メンバーから、プラスのストロークをもらえることで、自己肯定感がぐ〜んと高まり、元気になりましたし、また、照れくさいですが、成長し続けたい自分があることにも気づくことができました。今や、この協会は、私にとってなくてはならない、そして、嬉しい「学びの場」です。

1対1のカウンセリングでは、受容され、共感されることで、「自分は一人ではない」という思いやつながり感を持つことができ、それにより、自ら持っている力を出せるようになっていくことができます。しかしながら、社会で生きていく時に必要なソーシャルスキル、コミュニケーションスキルが不足していたり、上手く育っていないがゆえの悩みや問題もあり、それを、個別カウンセリングで身につけることは、難しいことだと感じます。SGEのエクササイズは、大きな6つのねらいを持って行われると同時に、メンバーとのやりとりの中でそうしたスキルが育つように作られています。私自身、この3~4年で、それまでの自らのスキル面での不足さと粗雑さを痛く感じながらも、少しずつですが、

いいスキルが身につけてきたかなあと思っています。コミュニケーションスキルを身につけることで、対人関係や自分に自信が付き、スキルがないがゆえの悩みからは、解放されていくことができます。まさに、このような「育つ場」こそ必要ですし、とても求められていると思います。



この4月から、新しい職場へ勤務し、カウンセリングに加え、キャリアコンサルタントとしての役割を果たすべく毎日を過ごしていますが、ここでも、来所者(求職者)には、「自己理解」ということが求められます。「自分は、何をしたいのだろう、何ができるのだろう、何に向いているのだろう？」こうした問いにたった一人で、振り返りをすることで、自己理解ができるのならば、それにこしたことはありませんが、多くは、他者を通して、自らに気づくことができるようです。私の希望のひとつは、学校だけでなく、構成的グループエンカウンターが様々な社会やコミュニティで行われ、それを通して、人と人とが交流でき、自らに気づき、そして、自信を深めて、成長しつづけることができるようになったらいいなあということです。そのためには、もっともっと、この場で学び、それを、より多くの機会や場で広げていきたいと考えています。

この度、協会の運営委員にご推挙いただきました。これまで皆さんからいただいたことへの感謝の思いを胸に、さらに自分が成長するためにも、与えられた役割をできる限り応えていくことで、会のお役にたてたら、とてもうれしく思います。

みなさん、よろしくお願ひいたします。

☆カウンセリング・トピックス

「相談で記録をとる」ことは広く知られているが、「記録は苦手」「書いているが、役立っていない」と感じている者も少なくない。

記録をとる第1の意味は、「繋がり」である。面接前に前回の記録に目を通すことで、相談の流れを把握することが出来る。担当ケースが少ないうちは、記録がなくても大丈夫かもしれないが、ケース数が増加すると混乱してしまうモノ。毎回の面接の前に、過去の記録に目を通す習慣をつけるようにしたい。

第2に、記録をとることで、「面接場面を振り返り、気づきを得る」効果が期待できる。面接中には腑に落ちなかったことが、記録を書くうちに納得できた...ということもある。また、カウンセラーが自己の対応を客観的に見直し、内省する機会にもなる。

この「振り返り」の意味もあるので、記録は面接終了直後に思い出しながら、10分程度で書くのが良いと言われている。内容の詳細な記述は必要無く、後述のポイントを押さえていけば、メモ書き程度でも構わない。

記録をとりながら面接する人もいるが、これはあまり勧められない。書くことに気をとられて聴く姿勢が崩れたり、クライアントの表情や動作などの非言語的なサインを見落とす恐れがあるからだ。

記録する内容は、概ね以下のような点を記載出来ると良いだろう。

まず、どのような目的で来談したかの「主訴」。時に話題がコロコロ変わり、何を相談したいのか分からないクライアントもいるが、そのような場合は「何が主訴か分からない」旨の記録をしておく。

次に、その問題に対するクライアントの態

「面接記録について」

度や受け取り方、今まで試みられた対処など。クライアントの個別性が表れる部分である。同じ意味で、クライアントのリソース(資源)も記載したい。洞察力などの知的な能力、健康面や体力的な資質、経済面や援助が期待できる人間関係 etc., 問題解決の為に役立つ要素を忘れずに書き留めておく。

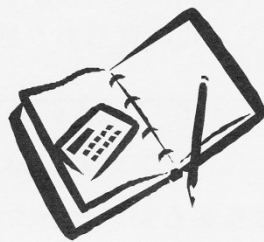
また、クライアントとカウンセラーの関係性・リレーションに関する記述も参考になる。これは、クライアントの表情・動作などの非言語面に見られることも多い。「沈黙がち」「深い頷き」「時計を何度も見る」「不機嫌そうな表情」「声が震えていた」etc.。このような特徴を記載することで、後々になってもその回の面接を鮮明に思い出すことができるだろう。

記録には、「どのような処置をしたか」も記載する。例えば、助言、他機関への紹介(リファー)、現実的な調整作業(ケースワーク)、各種技法によるアプローチ(例えば、リラクゼーションの施行など)が考えられよう。

最後に、記録の扱いにおける「守秘」について。クライアントの秘密を保持するために、面接室の外に記録を持ち出さない、用紙には氏名ではなく整理番号やイニシャルを記入する、廃棄時にはシュレッダーにかける...といった配慮をすることも、教育カウンセラーには必要である。

参考文献

『カウンセリングの技法』
; 誠信書房, 國分康孝,
1979



浅沼 知一(協会理事・上級教育カウンセラー)

2007『事例スーパービジョン』の感想から

2月3日(土)、跡観学園女子大学の片野智治先生をお招きし、秋田の遊学舎において、「事例スーパービジョン」が行われました。全国に先駆けて実施された「事例スーパービジョン」に参加した皆さんの感想を紹介します。

- ◆ 今回、参加者のピアグループでのシェアリングからスーパーバイザーのスーパーバイズの形式に始めて参加しました。自分たちもアイディアを出し合ったケースに対して、スーパーバイザーがスーパーバイズするので、そのケースのポイントの押さえ方・カウンセリング技術の実際場面での使い方・スーパーバイザーの気持ちを考えての展開の仕方など大変参考になりました。まさに「百聞は一見にしかず」でした。たくさんの具体的なイメージがもてたことで自信も増しました。
- ◆ いろいろな場面で苦労されている先生方のお話をうかがえ、よかったです。一生懸命子どもたちに接している姿に感動しました。子どもたちは幸せだろうと思います。また一方で、先生もそういう子どもたちとの出会いがラッキーだったと思える日がくることを願っています。
- ◆ S Vでお教えいただいた内容(ソフト面)もタイヘン参考になりましたが、S Vの構成・進め方(ハード面)についてもご指導いただき、とても勉強になりました。
- ◆ ピアグループとは「明日は我が身」という同等の立場であること、スーパービジョンをグループみんなが聞き合うことでさらに新たな気づきが生まれたり、視界が開けたりすることができ、自分自身の力量を高めていくことにつながることで、また何よりも事例提供者を大きく励まし元気にするものであることなどなど、どれも自分にとって大きな発見でした。この後、また機会がありましたら、ぜひ勉強していきたいと思えます。
- ◆ 参加していて感じたことは、アセスメントや対応策を考える時間が特に設定されておらず、自然体で臨むことができたということです。質問の時間30分間の中で、明確ではないが、事例提供者がぼやっと何とかやっていけそうな雰囲気が出てきたように感じました。そして、片野先生のスーパービジョン一言一言が、そのぼやっとした感じをはっきりとさせてくれる、具体的な内容でみんなが、事例について学び、元気になるものであったと思います。参加者の配置(テーブルをよせて、サークル状になって椅子に座る形)、話し合う内容や時間の設定など、これもSGEの一つだと感じました。
- ◆ シェアリング方式で行うと、参加する側の「いっぱなし」という点が上手に解消される気がしました。その点で、事例提供者が元気になるというのはとても大事なことです。よりよい今後の関わりのために、どのような「スキル」が必要なのかを考える視点と、提供してくださった事例に「自分」を想像しながら仲間と考えあうことができるという点で、共に育ちあう感覚を覚えました。

編・集・後・記

今年度も、ますます「おもしろくてためになる学びの場」が充実していく一年になりそうです。これからも、皆さんと共に、大いに学び合ひましょう。(N)